



広くて浅い世界 目指すもの、好きなこと

Artist

小谷 恵子 KODANI Keiko
芸術専門学群構成専攻 2 年



Writer

是永 紫帆 KORENAGA Shiho
芸術専門学群芸術学専攻 2 年

今回、取材対象になってくれたのは芸術専門学群構成専攻 2 年生の小谷恵子さん。「こういうもの作っているんだ」まだ大学に入学したばかりの頃、彼女がそう言って見せてくれたものは、一冊のノートだった。一見すると何ら変わったところのないリングノート。しかし表紙をめくると、そこには彫刻が刻まれていた。ノートの厚みを活かして、浮彫が施されていたのだ。



《無題》

それは筆者にとって、生まれたての作品というものを初めて生で見た気がした体験だった。作り手とその作品と一緒に呼吸をしているように感じられた。ここでは作り手としての小谷さんが、これまで作品とどう向き合ってきたか、これからどう向き合っていくのかを尋ねた。

これまでの自分

大学入学当初、小谷さんは構成専攻の構成領域志望だった。この構成領域で課題としているのは、自分の中で美しいと思う規則を見つけ、それに従って制作をする。授業で制作したのは紙を切り貼りして組み立てていく紙立体だった。



《無題》

ここで彼女は「はまる」という言い方をした。「紙立体の場合は授業で制作をして、これは面白いと思った。それで紙をいじるのにはまって、課題の制約を無視してどんどん大きいものを作っていた。課題では 120 センチの立体を作ることになっていたのが、それじゃ小さいと思って最終的には 150 センチ、自分とほぼ同じ大きさの立体を作ってしまった(笑)」この頃は他にも飛び出す絵本など、紙素材のものにはまっていたという。「はまる」という言い方に、彼女の作品に対する姿勢がうかがえるように思える。仕事や課題だと思ってこなしていく制作だけではなく、面白いと感じたものはとことん追いつめているのだ。ただやはり、そこには趣味の移り変わりのような感覚もあるらしい。「先生に見せてもらったアルファベットが飛び出す絵本が面白くて、真似をして自分で立体の文字を作っていた。春休みに 26 文字完成させようと思っていたのに、急に今の専門を志望することに将来の不安を感じてしまって。自分は何が好きなのだろうと

改めて考えたときに、クラフトのような手作業が好きだと気が付いた」

デジタルとアナログの間

2 年生の春からは、構成専攻のクラフト領域志望になった。「高校生の時に見たある映像があって。木目を活かして、ケーキをかたどったオルゴールを作っている工房を紹介する映像。これを見て、『ああ、いいなあ』と感じたことを思い出した」手作業が好きだと言う彼女は伝統工芸にも惹かれるものがあると語っていた。

また、一つのものにはまり込みすぎると、寝食も忘れて熱中する質だ。この年の夏休みはひと月以上もの間、一日の大半を費やして家にこもり絵を描き続ける生活をしていた。「描きすぎたのか、腱鞘炎になった。それでも制作熱がおさまらなくて。幼いころ、矯正される前は左利きで、痛めたのが右手だったから、左手に持ち替えて描こうとしたほどだった」この頃は手描きのイラストだけでなく、ペンタブレットを用いてのイラストにも熱を入れていた。「やっぱり手作業っていう部分が好きで、アナログのものが自分に合っているように思う。構成専攻の授業で、イラストレーションソフトを使ったりしてデジタルなツールにも触れたけど、ペンタブレットはデジタルとアナログの間と言うか、とても自分に合ったツールだと感じた。構成の授業では紙や絵具、パソコンまで色々な道具に触る。その中から自分に合った道具を見つけて、よりたくさん方法を試している。授業は、はまり込む前のきっかけみたいなもの」

趣味極まる

秋学期の授業では、クルミの木を彫っ

て作る器や、プラスチック樹脂を用いたフィギュアの制作をしているという。フィギュアについては、趣味としてガチャガチャのものを収集しているという話を以前から聞いていた。趣味が向上して、自分で制作したいという欲につながったそうだ。「海洋堂というフィギュアのメーカーがあって、そのフィギュアのラインナップがとてもマニアック。しかも細かなこだわりが込められていて、本当によくできている。こういうものを自分でも作ってみたいと思った」具体的にどんなフィギュアを作りたいのか尋ねてみると、きもちわるいもの、という答えが返ってきた。「生物図鑑に載っている蝶や蛾の写真を眺めていて、動いていると気味が悪いと思うのに、静止画になればこんなに美しく思えるのだと気が付いた。他にも、カエルやトカゲのような生き物をきもちわるいと感じる人は多いと思う。実物だったら絶対に触らないようなものを、小さくてかわいいフィギュアにして、手に取りたくなるようなものにしたい。リアルだけど、小さいカエルがビームを発射していたらかわいく見えると思う。そういうきもちわるいものの、かわいさや美しさを表現してみたい」

表現したいと思うからには、生き物に対する格別な愛情というものがあるようだ。夏休みには実家で魚の飼育を行っていたという。「生き物を育てて成長を見守っていく過程がとても好き。でも遺伝子の仕組みとかには興味がなくて(笑)。教科としての生物は全然勉強しなかった」好きなものにはとことん熱中する。しかし興味が無いものは全く手を付ける気にもならないと、語る本人が苦笑いをしていた。

少し前の話と、これからの話

高校時代、地元鳥取で美術科のない普通校に通っていた。その上進学校でもあり、美術科目での受験はあまり応援されなかったところもあったようだ。十分な制作時間はなく、長期休業の際には課外授業を受けずに、県外の美術予備校に

通っていた。「鳥取では美術出来ない。そう思って大阪の予備校に通ったりしていた。高校は進学校だったから勉強の方も大変で、美術の勉強のために作ってしまった穴は周りの友人からノートを借りるなどして埋め合わせていた。興味のあるものにはとことんはまり込んで、そうでないものには手もつけないのは高校生の時から今まで変わっていない部分で、教科によってはセンター試験が近づくとほとんど勉強していないものもあったくらい。でも、自分にむらがあって不完全だからこそ応援してくれる友人や先生、家族の支えを大切に感じながら両立して大学まで来られた」

高校時代に思う存分制作が出来なかった反動なのか、現在の制作意欲は冷めそうにないという。これからはどのようなものに挑戦していきたいのだろうか。「フィギュア制作もちろんそうだし、ペンタブレットで描いたイラストを使って、ポストカードの制作もしている。自分の好きな魚とラブレターを組み合わせた『鯉恋シリーズ』というもの。実は一日限定で、地元の販売イベントに出品する計画もある。あと、今勉強して

みたいと思っているのはスカルプトリス。3D プリンターでモノを作るとき等に使える、デジタルスカルプト(彫刻)のソフトウェアのこと。これはフィギュアのデザインにも使える。アナログが自分には合っていると思って、興味があればこのようなデジタルツールにもどんどん挑戦していきたい。アナログもデジタルも、興味のあるものは基礎を学んでおきたい。たくさんのことをそれなりに出来るようになりたい」

広く浅く、という言葉が彼女から最初に聞いたのは、出会ったばかりの頃にノートの浮彫を見せてくれた時だった。今もう一度この言葉を取り出して、小谷さんは制作が楽しくてたまらないと語った。「広く浅く、いろいろなものに手を出してみる。そうしていくうちにまた世界が広がって、興味も飛び移っていく。そしてまた世界が広がって…本当にいろいろなことがしてみたい」彼女の見ている世界は確かに広く、話を聞きながら筆者も片足を突っ込んだ気分になってみれば、おやひょっとして、これは結構な深さがありそうだと、そう感じさせられた。



《鯉恋シリーズ》